

## 内水面魚類生息環境調査

### ～東京の水がめ奥多摩湖の魚たちの現状～

奥多摩湖は都民の水がめとして多摩川を堰き止めて造られた人造湖です。都心から手軽にいける湖として都民に親しまれています。

センターでは、内水面魚類生息調査として、多摩川の本流・支流、奥多摩湖に定点をもうけ、魚類相の変化をモニタリングするため、3年ごとに調査を実施しています。今回は、平成30年度に奥多摩湖において実施した刺網を主体とした調査の結果を報告します。

実施機関	振興企画室	事業名	内水面魚類生息環境調査
------	-------	-----	-------------

#### 【背景・ねらい】

奥多摩湖（小河内貯水池）は、都民の水がめとして昭和32年に多摩川を小河内ダムにより堰き止め湛水した人造湖です。その集水域は東京都と山梨県に及びます。湛水以前には8種類の魚類が生息していましたが（写真1）、湛水後、水産増殖を目的に在来種以外の魚類の放流も行われました。センターでは奥多摩湖において、魚類の生息状況を把握することを目的とした調査を3年ごとに実施しています。平成30年度は奥多摩湖留浦ドラム缶橋に刺網を設置し、調査を実施しました。本報告では平成30年度の調査結果とともに、奥多摩湖の魚種の変遷を報告いたします。

#### 【成果の内容・特徴】

- ① 平成30年9月5日に奥多摩湖留浦のドラム缶橋に三枚網12反、ワカサギ網2反、ビンドウ7個を設置し、魚類の採集を行いました。翌日の網揚げで魚類14種224尾、エビ類2種10尾を採集しました（表1）。
- ② 魚種別にみるとスゴモロコ123尾（全長50～127mm、平均87mm）、次いでホンモロコ39尾（全長77～133mm、平均121mm）、ウグイ26尾（全長53～251mm、平均106mm）、ギンブナ11尾（全長248～363mm、平均329mm）、ワカサギ9尾（全長85～156mm、平均114mm）の順に多く採集されました。
- ③ これまでの調査結果をとりまとめ年代別に魚種組成を整理すると、1970-80年代はオイカワ、ホンモロコが主体、1990-2000年代はワカサギ、オイカワが主体の組成でしたが、2010年代は、組成が大きく変わりスゴモロコが主体となり、オイカワはほとんど獲れないといった結果となっています（図2、写真2,3）。
- ④ スゴモロコ、ホンモロコ、オオガタスジシマドジョウ、ヨシノボリ類、ハスなど琵琶湖産の国内移入種が目立つようになりました（写真5）。その他、特定外来生物のオオクチバスとブルーギルが記録されています（写真4）。

#### 【成果の活用と反映】

昭和33年以降の調査で計25種の魚類が確認されました。そのうち湛水前から生息が確認されていた種は5種、その他は、放流種、混入種、密放流種と思われる種でした。また、ここ10年で魚種組成が大きく変化していることもわかりました。今後もモニタリングを継続し、調査を通じて蓄積された知見を、貯水池の管理者である水道局に報告していきます。内水面魚類生息環境調査の結果については、河川、湖の環境の保全や復元に活用していくとともに、内水面漁業の活性化を図るため、東京の河川、湖の特徴や魅力を都民の皆様に発信していきます。

（橋本 浩）



図1 奥多摩湖調査位置と調査地点の留浦浮き橋（左写真）

表1 平成30年度調査で採集された魚類とエビ類

No.	種名	漁法 数	ワカサギ網	三枚網	ビンドウ
			2	12	7
1	ワカサギ	3		6	
2	ホンモロコ	1		38	
3	材ガタジシマトシヨウ			4	
4	スゴモロコ	24		95	4
5	ウグイ	3		8	15
6	オイカワ				2
7	ギンブナ			11	
8	コイ			3	
9	カマツカ			2	
10	ナマズ			1	
11	ウキゴリ			1	
12	ヨシノボリ類				1
13	カジカ			1	
14	ハス			1	
魚類合計			31	171	22
1	テナガエビ				1
2	スジエビ				9

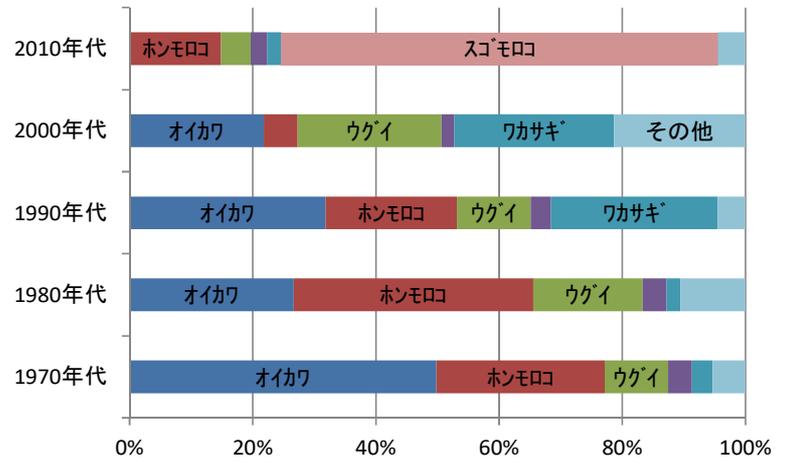


図2 年代別魚種組成の推移

※年により反数、目合が異なるため参考として



ウグイ



オイカワ



オオクチバス



ヤマメ



スゴモロコ



ワカサギ



ブルーギル

写真1 湛水前からの在来種

写真2 増加傾向の魚種

写真3 減少傾向の魚種

写真4 特定外来種生物



スゴモロコ



ホンモロコ



ハス



ヨシノボリ類



材ガタジシマトシヨウ

写真5 琵琶湖由来の国内移入種